

エジソン

ど りよく ひと せ かい いち はつ めい おう
努力の人・世界一の発明王

久保 喬



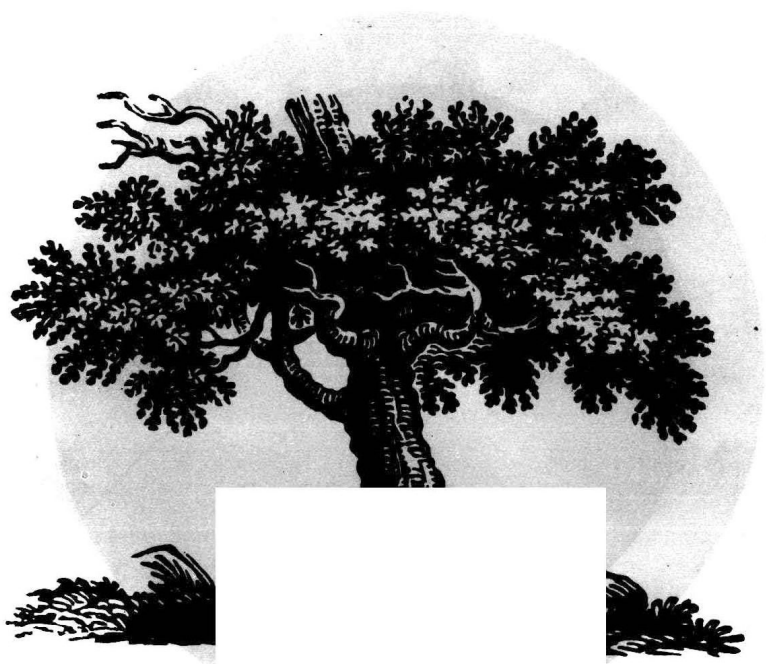
児童伝記シリーズ

3

ジソン

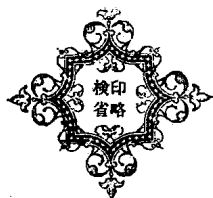
ど りよく ひと せ かい いち はつ めい おう
努力の人・世界一の発明王

久保 喬



3

児童伝記シリーズ



N. D. C. 289 偕成社 202p. 22cm. 1974

児童伝記シリーズ 3

エジソン

1974年 重版 10

久保 喬—————著者

今村 広—————発行者

小泉松三郎—————印刷者

新陽印刷—————印刷所

東京都文京区白山2の13の11

株式会社 偕成社—————発行所

東京都新宿区市ガ谷砂土原町3の5 下162

電話 (東京) 260—3221 (代) 振替 東京1352番

© 1958年

—————落丁本・乱丁本はおとりかえいたします—————

8323—503030—0904

printed in Japan.

この本について

エジソンは、電灯や、ちくおんきや、映画などを発明したえらい人です。

このエジソンも、はじめは、みんなに、ばかな子だといわれました。

そういう子が、どうして、大発明王といわれるまでに、なったのでしょうか。

それは、エジソンが、いつも、こつこつ、べんきようと、どりよくをつづけたからです。

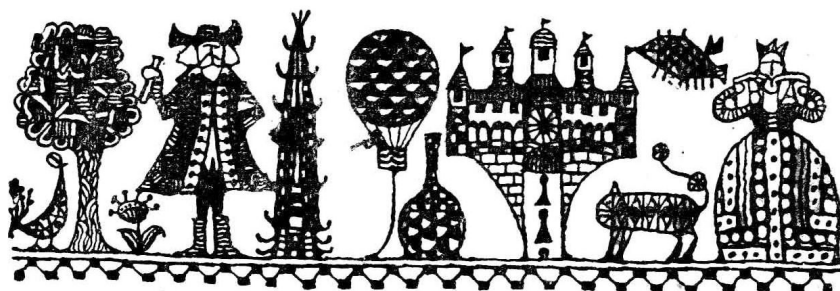
この本には、げんきでゆかいなエジソンの、子どもころのことをはじめ、いろいろな発明をしたときの、おもしろいおはなしが、たくさんあります。

みなさんも、この本をよんで、ほんとうに、世の中のために、りっぱな人になってください。

久

保

喬



もくじ

たまごをだいた子

.....ハ

わらわれたアル

.....ハ

はじめてのった汽車

.....ハ

たかいたかい、とう

.....六

おかあさんが先生

.....四

空とぶにんげんのゆめ

.....四

はたらく少年

.....三

しんぶんうり子

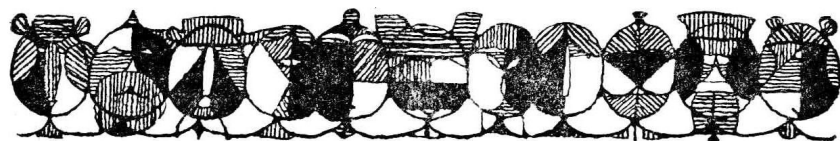
.....三

汽車の中のけんきゆうしつ

.....老

子どものしんぶん社長

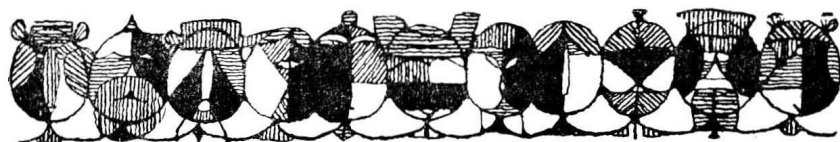
.....空





でんしんあそび……………
 汽車のかじ……………
 ゆかいなでんしんぎし……………
 あっ、あぶない……………
 いねむりぎし……………
 でんしんきょうそう……………
 なつかしい家……………
 がんばるわかもの……………
 すごいべんきょう……………
 ポケットいっぱいのおかね……………
 かなしい日……………
 でんわの発明……………

二五
 二四
 二三
 二二
 二一
 二〇
 一九
 一八
 一七
 一六
 一五
 一四
 一三
 一二
 一一
 一〇
 九
 八
 七
 六
 五
 四
 三
 二
 一





発明王エジソン

ものをいうきかい

メンロパークのまほうつかい

でんきの光り

どこまでもやる

映画の発明

せかいのたから

エジソンについて(解説)

一

二

三

四

五

六

七

八

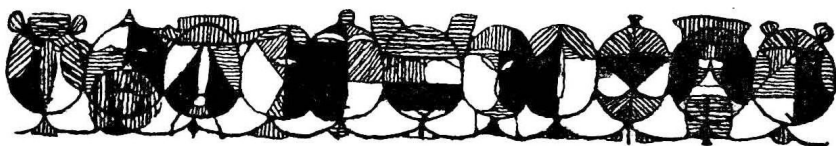
口絵・さし絵

相

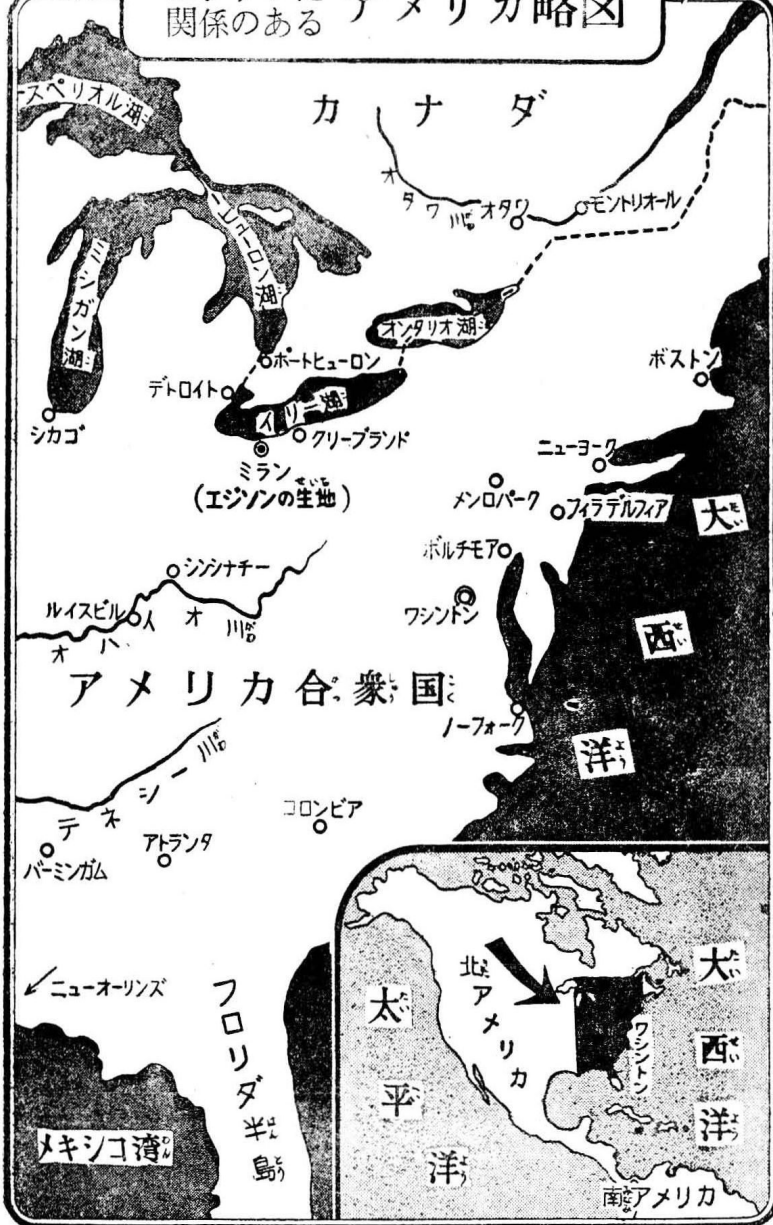
沢

光

朗



エジソンに
関係のある アメリカ略図



エジソン

努力どりよくの人・世界せかい一の発はつ明めい王おう



久保 喬



たまごをだいた子

わらわれたアル

「アルや、そんなに、ビスケットをたくさんとって、どうするの。」

と、おかあさんがふりむいてたずねました。すると、小さいアルは、ふくれたポケットをおさえながら、

「うん。ほく、いいことをおもいついたんだ。ちょっと、そとへいつてくるよ。」

そういって、だいどころから、そとへでていきました。

家のうらに、とりごやがあります。そこへきて、アルは戸をあけました。むこうのすみの巢の上に、がちょうが、じっとしています。

「おお、ルル。」

と、アルは、がちようの名をよびました。

「おまえ、たまごをあたためているんだね。たまごを、ひよこにかえすのだろう。」

アルは、さっき、そのことを、おかあさんから、おそわったばかりでした。

「でも、ルル、なかなか、ひよこは、でてこないねえ。ぼくがかわって、あたためてみるよ。」

ほんとうに、たまごがひよこになるかどうか、アルは、じぶんで、ためしてみたいとおもったのです。それで、がちようを巢すのそとへだしました。巢すには、白しろいたまごが、六むつならんでいます。その上うへへ、アルは、そっと、しゃがみました。

それから、しばらくたちました。夕ゆふがたになって、おだいどころで、おかあさんが、

「アルや、アルや。」

と、よびました。

「ちよっと、きて、てつだっておくれ。」

ところが、へんじはきこえません。

そこへ、おとうさんが、かえってきました。

おとうさんも、そとでは、アルを見かけなかったといいました。

「どうしたのでしょうか。」

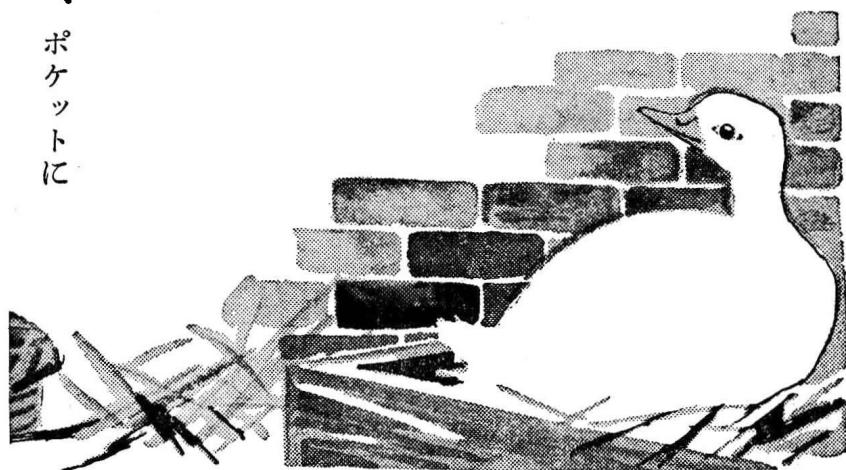
おかあさんは、うらへでていきました。ものおきをのぞきましたが、アルはいません。とりごやのまえへきたとき、がちょうの巢すの上うへにいる、アルを見つけた。

「まあ、アル、なにをしているの。」

「うん、たまごをかえしているんだよ。」

アルは、わけをはなしました。

「たまごを、ゆっくりあたためようとおもって、ほら、ポケットに



いっぱい、おべんとうのビスケットも、もってきているよ。」

「まあ、まあ。」

おかあさんは、わらいだしました。

にんげんがあなたためにも、たまごは、



かえらないときいて、

アルは、こやからでてきました。

「アルは、なんて、へんなことを、かんがえる子どもだろう。」

と、はなしをきいたうちじゅうのものも、みんな大わらいをしました。

そういえば、小さいアルは、ふだんから、すこしかわった子どもでした。

ねえさんが、おだいどころで、がちゃんと、おさらをおとしてこわすと、そばへいっ



て、たずねます。

「ねえさん、このおさら、なぜ、われたの。」

「おとしたからよ。」

「おとすと、なぜ、われるの。」

「そんなこと、しらないわよ。」

ねえさんは、こまってしまいます。でも、アルは、われたおさらを見つめて、じっと、かんがえています。

にいさんが、にわで、とんぼをつかまえていると、見ていたアルが、

「にいさん、とんぼの目は、なぜ、あたまの上にあるの。」

と、たずねます。



「そんなこと、ほく、しらないよ。アルは、なんでも、なぜ、なぜって、きくんだね。」
にいさんは、そういつてわらいます。

それで、みんなは、いつのまにか、アルのことを、『なぜなぜぼうや』と、よぶようになりました。

アルの家から、すこしはなれたところに、川がありました。川のそばには、船をつくる、ぞうせん所がたっています。アルは、そこへも、ときどき、あそびにいきました。

「おお、なぜなぜぼうやがきたな。」

と、だいくさんたちはいいました。アルは、ここでも、いろいろなことを、だいくさんにききました。

「おじちゃん、なぜ、木で船をつくるの。」

「木は、しずまないからさ。」

「なぜ、しずまないの。」

「さあ、わからないねえ。うるさいぼうやだ。」